

## スキゾ・アナリーズとは何か？

小谷 晴 勇

### 一、学問とは何か？

大学に入学してから今日まで、十六年がたった。国立大学に奉職し、哲学で飯を食うようになってから計算しても、はや四年経つ。学生時代と、教員となつてからとは、むろんちがいはある。が、なんとしても不自然な作業を強いられてきた、という実感をぬぐいさることはできない。

わたしはまず、この実感から出発したい。これはわたしのいつわらざる体験的実感である。生の実感である。哲学において、おのれの生から汲み出したのではない問題意識は、およそ空疎であり、無意味である。たとえそこから出発して論文や本ができたとしても、それらは抽象的思弁にすぎない。哲学あるいは思想としては、むしろ欺瞞である。哲学的思索の所与としてあるべきなのは、哲学史に名をとどめる不朽の偉人たちのテクストではなく、無名のわたしの生なのだ。自己の生の只中より思索の問題を提起することがなにより肝要なのである。わたしの強いられてきた作業の中心をなすことは、外国語を読んで解釈することである。たとえばX氏の思想を研究課題ときめたとして。少数の例外をのぞいて、X氏はたいていは欧米人であり、その著作もたいていは外国語である。まずそれを原語で読み、解釈することが要求される。さらに、X氏について書かれた研究書・論文をできるかぎりくまなく読むことが要求される。それらもたいていは外国語で書かれている。例外はあるが、それらのうち日本語でかかれたものを読む作業は、あまり高く評価されない。

さて、以上の作業をつうじて、適当なテーマを研究課題として設定する。そして、一定の手続きにしたがつて、論文を書く。これはたんに

なる文章ではなく、学術論文でなければならぬ。学術論文でなければ学問ではない。学術論文とはなにか？それは一定の形式をもつ。すなわち、その課題について、すでに発表された諸説の紹介をおこなったのち、それとはことなつた自説を展開する。学術論文には相当数の注がともなわなければならない。学術論文には「わたし」が登場してはならない。一人称は学術論文のタブーである。

さすがに、学術論文はおもしろくはならない、とまで明言されることは少ない。しかし、先にのべた学術論文の形式的・内容的条件を忠実にまもるとしたら、どうしてその文章がおもしろくかかれようか。だから実際には、おもしろい学術論文というものは、存在しえないのである。おもしろい文章は学問的でないと漠然たる（しかし強固な）通念は、かくして生じたのである。

しかし、わたしにいわせれば、これらの学術論文の条件たるや、すべて枝葉のことにすぎない。先賢を尊重することが大切でない、とはいえない。だが、そもそも他者の著作の解釈からはじまるということじたい、転倒しているのだ。哲学の場合、その先賢のほとんどが外国人であるということもおおきな問題である。しかしこれらの事柄は、暗黙の了解事項となっており、ふつう問いかえされることはない。ここをあえて問題としなければならぬ。本当は、心ある人ならば、なにかがおかしいと、かんじているはずである。しかし、それは沈黙において問いかえされるのであつて、めつたに声にはならないのである。声にするためには、学者・研究者としてのアイデンティティーを、なにかがしかかけなければならぬから。

学問とはなにか？端的にいつて、それはおのれの生きている現実の場所を動かしている原理を探究する営みである。「おのれの生きている現実の場所」とは、世界的・宇宙的空間的ひろがり、歴史的な時間的持続とともにふくみつつ、文字通り自分の生きている卑近な日常生活が営まれてる現実をも、もちろんのこと、ふくんでいるのである。そのようなものとしての現実の場をつらぬいている原理を探究する営みこそが、学問であるはずなのだ。「おのれの生きている現実の場所」を先賢の著作とかんちがいで、たとえばギリシャ語やサンスクリット語などの解釈に全精力を費やしているのが日本における「学問」の現状なのだ。しかも国立大学においては、国民の税金を主要財源とする国家予算をつかつて、このような「学問」がおこなわれているのである。たんにおこなわれているのではない、研究者としての身分が保障され、生活者として経済的に保護されつつ、「学問」は営まれているのだ。先賢の著作の解釈が学問でありうるのは、先賢の著作が「現実の場所を動かしている原理を探究する」過程で、なにかがしかの示唆がえられるかぎりにおいてである。先賢の著作が現実をうごかす原理

を探求するうえで、役立つかぎりにおいてである。先賢の著作の解釈を学問とかがえることは、手段を目的ととりちがえているのである。いまわたしは、学問とはおのれの生きている現実の場所を動かしている原理を探求する営みである、といった。しかしこれだけでは、不十分である。学問の半分をのべているにすぎない。だから、さらにこう付け加えなければならぬ。その原理においてとらえられた現実には、修正すべきところがあるとすれば、それを修正すべきなのである。たんに現実をつらぬく原理を探求するだけにとどまるのではなく、それをふまえて現実をよりよいものに変革するための実践を積極的におこなうべきなのである。その実践をもふくめて、学問なのだ。だから学問とはたんなる知的な原理の探求にとどまらず、積極的な実践もふくむべきものである。というよりも、理論と実践を分離して二元論的にかんがえることが、そもそもおかしいのである。厳密な意味では、理論なき実践も、実践なき理論も、ともに存在しえないはずである。理論と実践とは、根本的には不可分であるはずだ。これがわたしの学問観である。研究者としてのわたしのプロフェッション・ド・フォアである。このような学問観抜きに、わたしはこの論文を書きはじめることはできない。どうか一人称による告白を、お許しいただきたい。

本論文はドゥルーズ・ガタリの主著である『資本主義と分裂症』全三巻（第一巻は『アンチ・エディプス』、第二巻は『ミル・プラトー』）の方法ともいえるスキゾ・アナリイズとはなにかを明らかにすることを当面の目的とする。その作業を通じて、真の学問のありかたについて、なにがしかの示唆をえられれば望外の幸せである。

## 二、精神分析にさからって

では、スキゾ・アナリイズ schizo-analyse とはなにか？それはドゥルーズ・ガタリのつくりあげた概念である。彼らは精神分析（プシカナリイズ psychanalyse）に反対してそのかわりにスキゾ・アナリイズを提唱したのである。

周知のようにフロイトは、精神における意識のレベルのほかに、無意識の層があることを主張した。無意識は、とうぜん意識されない。意識されない無意識の存在がどうやってわかるのか？意識されない無意識の内容を、いかにわれわれが知りうるのか？無意識という概念は挑発的で魅力的であるが、同時に冒険的でパラドキシカルな概念である。

そこでフロイトがかんがえだしたのが精神分析である。当然のことながら無意識は意識されない。だから無意識を直接・無媒介的に知る

ことはできない。われわれが無意識を知るてだては夢にある。夢そのものが無意識である、というわけではない。そうではなくて夢には無意識が変形され、象徴化されて表現されている、とかがえられる。だから患者に夢をかたらし、それを解釈することによって、われわれは無意識を知ることができるのである。簡単にいえば、これがフロイトのかんがえだした精神分析である。以上のことによつて、無意識と精神分析とは不可分であることがわかるであらう。

ドゥルーズ・ガタリはこれにたいして全面的に異議を唱えるわけではない。フロイトの無意識の「発見」はずばらしい。しかし、精神分析はおおくの問題をかかえている。おかげでせつかく「発見」された無意識も、おおいに歪曲されて解釈されることになった。ここが問題の焦点である。フロイトの精神分析は、流派学派を形成して、社会的な勢力となっている。だからこういうべきだろう。フロイトとその流れを継承したフロイト流の精神分析は、無意識をたいへんに歪曲して解釈している。

いま、夢を媒介として無意識を知ることの妥当性、媒体としての夢の妥当性についての議論は、保留することにしよう。それを問わないとしても、フロイト流の精神分析はまちがっている。それは無意識を歪曲して解釈しているからだ。件の精神分析によると、無意識はつねに子供とその両親とのあいだの性的葛藤に還元されてしまうのである。男の子は、母親に性的な愛情・欲望をいだく。しかし、母親にはパートナーとしての父親が存在する。そのことによつて男の子のこころのなかには、父親との葛藤が生じるのである。これが、エディプス・コンプレックスである。父を殺して、母と性的関係をむすんだオイディプス王の神話にみごとに表現されているように、この精神的葛藤は普遍的なものである。(女の子の場合は、父親と母親との関係が逆になる。)しかし、ひとはこの葛藤をのりこえて成長する。この愛情・欲望は、おとなになるためにはあきらめねばならないのである。しかし、それがおおきな傷跡を精神に刻印する場合がある。それが後年神経症となつてあらわれるというわけである。

エディプス・コンプレックスによつて説明される状況が存在するのはたしかである。しかしフロイト流精神分析は、すべての無意識を両親に対する子供の性的葛藤に還元しようとする。そこがおかしいのである。すべての無意識が、両親の性的葛藤に還元してしまうということがおかしいのである。

無意識は、すなわち欲望である。人間の欲望は、もつと多様なものではないだろうか？はなしを小さな男の子の性的な欲望にかぎって議

論するにしても、小さな男の子の性的な欲望が、つねに母親にしかむけられないというのは、少しおかしいのではないか？ 小さな男の子の欲望のすべてが、母親への愛情と父親への憎悪であるとかんがえるのはいかなものか？ たとえば、小さな男の子だって、路地をはさんだ隣の家の少女に、愛情や欲望をいだくことだってあるのではないか？ そんなことは、だれがかんがえてもしぜんにありそうなことである。あたりまえのことである。性的な欲望が、異性の親に限定されるわけがないではないか。だが精神分析はこのような欲望をけつして認めようとはしない。精神分析によれば、隣の少女への欲望として語られるものは、けつして隣の少女への欲望ではなく、母親への欲望として解・釈・さ・れ・な・け・ば・な・ら・な・い・も・の・な・の・で・あ・る。さもなければその存在そのものが無視されなければならない。精神分析とは、かくも偏見にみちた文化的制度なのだ。それはあらゆる無意識を、無意識の欲望を、エディプス・コンプレックスの枠におさめて解釈しなければ気がすまないのである。こんな奇妙な解釈を金科玉条とする精神分析に、どうして真理が発見できるだろうか。

そこでドゥルーズ・ガタリは、精神分析のかわりにスキゾ・アナリイズ（分裂症分析）を提唱するのである。スキゾ・アナリイズは無意識をエディプス・コンプレックスに短絡的に還元することなく、多様性においてそれをとらえようとするのである。無意識の多様性を分析するのが、スキゾ・アナリイズである。

たとえば、ハンス少年の馬に対する強い情動がある。精神分析ならば、これをあるがままにはうけとらない。これをエディプス・コンプレックスという概念の枠組みにあわせるように解釈する。馬は本当は馬のことではなく、ハンス少年の父親を意味しているのである。だからハンス少年の馬への情動は、馬に対するものではなく、父親に対する恐怖感として解釈するのが正しい。馬を馬としてとらえてはならない。解釈しなければならぬ。エディプス・コンプレックスの形成に導くように解釈しなければならぬ。これが精神分析のやりかたであり、論理である。

これに対して、スキゾ・アナリイズは、エディプス・コンプレックスに基づいた解釈を否定する。そして馬を他のなにかを意味するものとして解釈するのではなく、少年の馬への情動を馬への情動として肯定する。少年は馬が意味する父親を恐れているのではなく、馬に強い共感を示しているのだ。少年は馬に成りたいのである。なぜ？ おそらくは、父親と母親と自分によって形成される家族という閉域の外に出たいという欲望のため。ひろいひろい世界にみずからをみちびき、多様な流れとみずからを接合させたいという欲望のために。少年は馬に

なりたいたのである。馬になって、エディプス・コンプレックスを形成するものになる家族という閉域から、逃走し、脱出しようとするころみである。これは馬をまねることではない。この場合の馬に成ることとは、馬の形態やその他の模倣によって実現されるものではない。そうではなくて馬とともに生きることによって実現されるのである。ハンス少年の馬への強い情動は、馬に成りたいという欲望であり、馬になって家族という閉域から逃れたいという欲望であり、馬とともに生きたいという欲望である。どうしてそれが父親への恐怖として解釈されねばならないことがあろう。実際、どこにも父親など出てきはしないのである。父親は、馬を解釈することによってはじめて登場するものなのである。馬をなぜ父親を意味するものとして解釈しなければならぬのだろうか？馬は父親ではなく、馬である。それが父親を意味しているのだからならぬという理屈は、無意識の欲望はエディプス・コンプレックスを形成している、という精神分析の前提からくるものである。というより、精神分析の理論からしか、馬は父親を意味しているのだからならぬという解釈は、出てこないのである。馬を馬としてとらえず、父親を意味するものでなければならぬというのは、精神分析の理論のなかでは自明のことであつても、いったん精神分析の外へ出てそれをかんがえなおしてみれば、強弁といわざるをえない。なぜ馬が馬以外のものでなければならぬのか。なぜ馬が馬以外のものであるときめつけなければならぬのか。それは精神分析の偏見といわざるをえない。いったん精神分析の理論的枠組みをうたがってみれば、自然と欲望のありようがみえてくるのである。エディプス・コンプレックスは、一見無意識を発見したようにみえた。しかし、それはその恣意的な解釈格子によって、かえって無意識のありようをゆがめて解釈してしまったのではないだろうか。無意識の欲望のありようを、すべて両親と子供とのあいだの性的な葛藤に還元して、それがほんらいもっている多様なありようを否定する結果に導いてはいなかっただろうか。

精神分析はエディプス・コンプレックス理論と不可分である。それならば、精神分析は無意識を真にとらえることに成功していない。いや、精神分析によって無意識を真にとらえることは不可能である。精神分析のとらえる無意識は、つねにエディプス・コンプレックスの仮説によって解釈され、ゆがめられてしまうのであるから。精神分析が無意識の欲望の多様性を認識することは決してない。エディプス・コンプレックス以外の欲望の解釈を認めてしまったならば、それはすでに精神分析ではないのである。われわれは、無意識の、エディプス・コンプレックスを形成するようなありかた以外の欲望を、とらえなければならぬ。とらえなければならぬといっても、それは精神分析

のように恣意的に解釈することによってそうするのではない。むしろ、精神分析という奇妙な無意識の解釈の制度の外にすることによって、それは実現されるのである。精神分析という無意識の解釈を否定することによって、無意識はみえてくるのである。いろめがねをはずすが良い。そのときいまここにはたらいっている無意識、いたるところではたらいっている無意識がしぜんにとらえられるのである。スキゾ・アナリーズというのは、とくべつなことをいっているのではない。あたりまえのことを主張しているのである。スキゾ・アナリーズの第一の主張は、いたるところで作動している無意識の多様な働きをとらえるために、精神分析といういろめがねをはずさなければならぬ、ということである。

### 三、『アンチ・エディプス』とスキゾ・アナリーズ

スキゾ・アナリーズがはじめて提唱されたのは『アンチ・エディプス』（一九七二年）においてである。以下、この本にそくしてスキゾ・アナリーズの何たるかを、すこしくわしく論じてゆくこととしたい。

『アンチ・エディプス』の第四章「スキゾ・アナリーズへの道」においてドゥルーズ・ガタリはのべている。

スキゾ・アナリーズの主張は単純である。欲望というものは機械であり、諸機械の総合であり、機械的組み込みである。つまり、欲望する諸機械である、ということである。欲望は生産の秩序に属しており、一切の生産は欲望する生産であるとともに社会的生産でもある。だから、われわれは、精神分析がこの生産の秩序をおしつぶし、この秩序を表象のなかにおしもどしたことを非難するのだ。…〔中略〕  
…生産は、表象の決定機関の下で、生産のうなりをとどろかせ続けているのだ…<sup>①</sup>

ここでは、スキゾ・アナリーズを提唱する彼らの意図するところが、端的にのべられている。しかしながら、彼ら独自のターミノロジーが、この端的な表現を難解なものとしている。ここで問題なのは「機械」machineという概念であり、「欲望する機械」machines desirantes という概念である。

ドゥルーズ・ガタリが「機械」という場合、それは異質なものの組合せ、組み込みのことである。だから、それを単に工業機械であるとか、産業機械であるとか、ハイテク機械であるとか、せいまいイメージでとらえてはならない。マシンやコンピュータといった具体的なものを限定的にイメージしてはならない。それらが「機械」でないというのではないが、ドゥルーズ・ガタリはこの概念によってもっと多様なものをかかんがえている。彼らがどんなものを例にあげているかというところ、たとえばゴールドバーク（アメリカの漫画家）のデッサンにえがかれた機械や、ティンゲリの作品などである。また、カフカの作品にあらわれた奇妙な機械（たとえばオドラテック）などもあきらかに念頭に置かれている。また、文学作品を「文学機械」とよぶこともある。このように、彼らの「機械」概念は途方もなく広汎なものである。

ではなぜ彼らはこのような「機械」の概念をつくったのだろうか。筆者もはつきりとはわからないが、おそらく人間主義（ヒューマニズム）への批判的態度を明確にするためであり、反人間主義的な理論構築への強い意思表示のためであろう。このように「機械」の概念を拡大すれば、人間も「機械」であり（なんとなれば、人間も異質なものの組合せ・組み込みによってできているのであるから）、その意味ではなんら特権的な存在ではなくなるのであるから。

さて、「欲望する機械」というのも奇妙で難解な概念である。しかしドゥルーズ・ガタリは、無意識を「欲望する機械」である、ととらえなおし、それを分析するのがスキゾ・アナリーズであるといっているのだから、スキゾ・アナリーズとはなにかということ論の際、この概念をさけて通るわけにはゆかない。ここで引用文にもどれば、彼らは「欲望というものは機械であり」、「つまり欲望する機械である」といっている。前半はすなわち欲望というものは異質なものの組合せである、と主張しているのである。彼らによれば、欲望とは今ここにはないなにかを求める欲求ではないのである。欲望には何もかけているものがない。ただ異質なものの組合せが欲望なのである。たとえば乳房から出てくるミルクを口で吸う。乳房—ミルク—口の組合せによる「機械」である。これが欲望である。そして同時に、これが「欲望する機械」（の一例）なのだ。欲望は「機械」であり、機械状をなしている。それをドゥルーズ・ガタリは「欲望する機械」とよんでいるのである。「欲望する機械」とはエディプス・コンプレックスによって解釈されていない、いまここで働き、作動している無意識のすがたである。その働くさま、作動するさまを分析するのがスキゾ・アナリーズなのである。

無意識というものは、精神分析によってとらえられているかぎり（無意識は意識に現前するものではないので、直接的にその存在を示す

ことはない。したがって、われわれにとって無意識が存在することを示すには、なんらかの媒介が不可欠である。その媒介が精神分析である。したがって無意識は精神分析と不可分であり、精神分析なしには無意識の存在すらも主張することはできないのである。(夢や物語のなかにのみ表現される、非現実のものとしてしか、存在しえなかった。だからドゥルーズ・ガタリが「欲望する機械」という一見奇妙な概念を創造した理由は、なによりもまず、それが現実には作動し、現実の生産をおこなう、現実的実在であるということを主張するためであった、とおもわれる。引用文中の後半にあらわれる「欲望する生産」production desiranteとは、「欲望する機械」の働きによる生産ということである。それが空想の世界のなかで夢や物語を生産するのではなく、現実の生産をおこなう、ということを彼らは、「欲望は生産の秩序に属しており、一切の生産は欲望する生産であるとともに社会的生産でもある」というふうに表示しているのである。精神分析は、無意識を解釈によつて表象のなかへとなんとかおしこめようとするが、「欲望する機械」たる無意識はそんな解釈には満足できない。無意識は夢や物語といった表象ではないからである。無意識は「欲望する機械」として生産の秩序に属し、現実には機能し、働き生産しているのである。「生産は、表象の決定機関の下で、生産のうなりをとどろかせ続けているのだ。」

破壊せよ。破壊せよ。スキゾ・アナリイズの仕事は破壊を通じて行なわれる。つまり無意識をまるまる清掃し搔爬することを通じて行なわれる。破壊せよ。エディプスを、自我の錯覚を、超自我のあやつり人形を、罪責感を、法律を、去勢を……<sup>(3)</sup>

無意識が「欲望する機械」であるとスキゾ・アナリイズが主張するためには、まず、無意識にかんするさまざまな誤解を一蹴しなければならぬ。それはすなわち、精神分析が無意識に付与してきたさまざまな偏見を批判し、否定することである。スキゾ・アナリイズはみずからの主張を実現するためには、まずこのような否定的な作業をおこなわなければならない。それなしにスキゾ・アナリイズはみずからの任務をはたすことができない、というのがドゥルーズ・ガタリの主張である。

エディプス・コンプレックスにかんする批判はすでに十分説明した。

自我とは、無意識においては錯覚にすぎない。「欲望する機械」において、たとえば、わたしたるアルトーは、わたしの息子であり、わた

しの父であり、わたしの母であり、わたしである。そしてわたしは神になることを感じる。わたしは女性になることを感じる。自己同一的な自我など、錯覚にすぎないのである。

超自我とは、無意識から自我を産み出そうとする。むりやり産み出そうとする。超自我は「欲望する機械」を力づくで支配しようとする。コントロールしようとする。自我とは、だから錯覚であると同時に、超自我の操り人形であるにすぎない。

「欲望する機械」としての無意識には、倫理や法律は存在しない。それは倫理規範にしたがって作動するのではないし、法律を遵守するわけでもない。倫理的であったり、道徳的であったりする欲望があるだろうか？ 法律に従おうとする無意識があるだろうか？ 「欲望する機械」には、倫理も道徳もかわりがない。したがって、無意識には罪責感も存在しない。存在するはずのない罪責感が無意識にあるとしたら、だれかが法律や倫理をもちこんだ結果として生じたに違いない。ちょうど自我が超自我によってもたらされたように。

そして無意識には欠如がない。否定的なものがない。「欲望する機械」には去勢もなければ去勢不安も存在しないのである。去勢や去勢不安もまた、だれかがあとから無意識に恣意的にもちこんだものにすぎないのだ。

だからこういわなければならない。「破壊せよ。エディプスを、自我の錯覚を、超自我のあやつり人形を、罪責感を、法律を、去勢を。」このようにスキゾ・アナリイズはまず、破壊という否定的な作業を通じて行なわれるのだ。

しかし、ドゥルーズ・ガタリは、次のように書いている。

ところが、スキゾ・アナリイズの否定的あるいは破壊的な任務は、いかなる仕方においても、その積極的な任務から切り離せないものである。(およそこの二つの任務は、必ず同時になされるべきものである。) 積極的な第一の任務は、解釈にはまったく頼らないで、ひとりの被験者に即して、この被験者の欲望する機械の本性、その自己形成、その作動を見いだすことにある。

スキゾ・アナリイズはけっして否定的な作業に終始するわけではない。エディプス・コンプレックスの影や超自我、法律や罪責感や去勢を告発すると同時に、「欲望する機械」の本性を、解釈するのではなく、とらえようとするのが肝要なのである。

では、とらえるべき「欲望する機械」とはどんなものなのか。さきに筆者はその一例を示したが、ドウルーズガタリがみずからそれを示している部分があるので、引用しておく。

欲望する機械、それは三つの部分、三つのエネルギー、三つの総合をそなえている。三つの部分とは、はたらく作動部分、不動の動者、隣接部分である。三つのエネルギーとはリビドー、ヌーメン、ヴォルプタスである。三つの総合とは、部分対象と流れの接続的総合、特異点と連鎖との離接的総合、強度と生成との連接的総合である。<sup>(3)</sup>

これが、ドウルーズガタリが無意識の究極的な姿であるとするところの「欲望する機械」であるが、きわめて抽象的でわかりにくい。

三つの部分にかんじていえば、はたらく作動部分とは雀蜂と蘭、自転車の笛と鼠の尻（いずれも彼らがあげている例）などである。精神分析の用語を使えば、部分対象に相当するものである。不動の動者とは、これらの作動部分、部分対象を組み合わせるための基盤であり、彼らによればそれが器官なき身体 *corp sans organes* とよばれるものである。これを先の作動部分との対照でいえば、部分対象—器官が作動して、器官なき身体が組合せの基盤の役目をはたしている、というところであろう。隣接部分とは、「機械」の作動の結果として最後に産み出される残余としての主体のことである。

三つのエネルギーは、基本的にはリビドー（性欲）であり、他の二つはこのリビドーの変容なのである。しかし、同じリビドーでも、生産たる接続的総合にかかわるエネルギーをとくにリビドーとよび、分配に相当する離接的総合にかかわるエネルギーをヌーメン（神霊）とよび、消費に相当する連接的総合にかかわるエネルギーをヴォルプタス（悦楽）とよんで、区別している。

接続的総合とは、簡単にいえば流れとその採取・切断である（たとえば口とミルク、肛門と糞）。離接的総合とは、主体ならざる主体の分裂であり分配であり、多様化である（わたしはわたしの父であり、母であり、息子である）。連接的総合とは、機械の傍らに残余としての主体をうみだす働きのことである（わたしは神になることを感じる、わたしは女性になることを感じる）。

要するに、おおよそ日常的な意識ではありえないような分裂症的な意識作用が無意識のレベルに存在し（あるいは存在していることがあ

り)、それを「欲望する機械」とよんでいるのである。そしてこの「欲望する機械」がおこなう欲望する生産と、技術機械や社会的機械がおこなう社会的生産は、同一の現実的生産（ただし体制が異なる）である、「欲望する機械」による欲望する生産はけつして幻想を生産するのではない」というのが『アンチ・エディプス』におけるドゥルーズ・ガタリの主張の要点である。

さて、ドゥルーズ・ガタリはスキゾ・アナリイズの第二の積極的任務として、四つの命題をかがげている。以下に列挙しよう。

スキゾ・アナリイズの第一命題は、一切の備給は社会的なものであり、何事が起ころうとも、それが歴史的な社会野を対象としている、ということになる。<sup>(6)</sup>

ここでわれわれは、スキゾ・アナリイズの第二命題を正確にのべることができる。それは、「社会的な諸備給のなかで、集団の、ないしは欲望の無意識的な備給と、階級の、ないしは利益の前意識的な備給を区別せよ」ということである。<sup>(7)</sup>

スキゾ・アナリイズの第三命題としては、「事実と権利のいずれの観点からいっても、社会野のリビドー備給は、さまざまな家族的備給より先なるものである」という命題が定立されることになる。<sup>(8)</sup>

スキゾ・アナリイズの最後の第四命題は、スキゾ・アナリイズが、リビドーの二つの極、パラノイア的・反動的・ファシズム的な極と、分裂症的で革命的な極を、区別するものだ、ということである。<sup>(9)</sup>

ここでいわれていることは、要するに欲望というものは本質的に社会的なものである、ということである。欲望とは家族内での性的欲望であるより、ずっとひろく社会的なものである、ということが彼らの主張の要点である。そして、そのうえで、社会的な欲望にも二種類あり、両者は対極をなしていることがのべられている。すなわち、ひとつは従属することを欲する反動的・ファシズム的な欲望であり、もう

ひとつは従属からの逃走を欲する革命的な欲望である。いいかえれば、欲望は本質的に社会的である、ということを見定めたうえで、その二つのタイプを分析し、両者の相互葛藤や相互作用の関係をあきらかにすることがスキゾ・アナリイズの任務である、ということである。

なお、第二命題に「集団の、ないしは欲望の無意識的備給」と「階級の、利益の前意識的備給」を区別せよ、といわれているのがややわかりにくい、簡単に区別すれば前者はあらゆる点からみて下部構造に属しているのに対し、後者はイデオロギーにかかわっているのである。イデオロギーは下部構造ではない。下部構造を反映した上部構造である。なぜこの両者を区別するかというと、革命的集団が、後者のレベルで革命的なのか、前者のレベルにおいても革命的であるのかによって、おおきくことなるからである。革命的集団といっても、前意識的レベルでそういわれる場合、無意識的備給のレベルでは、隷属を欲している「隷属集団」である場合があるからである。真の革命的集団は無意識的な備給のレベルにおいて、革命的なりビドー備給をそなえている「主体集団」でなければならぬ。そしてこの二つのタイプの集団は、一方から他方へと移行する可能性をつねにはらんでいるのである。つまり、スキゾ・アナリイズは、一見革命的にみえる集団が、反動的であったり、すぐに反動化したりするという歴史的事実を分析しうるものでなければならぬ、ということである。

しかし、スキゾ・アナリイズの任務はこれにとどまるものではない。ドゥルーズ・ガタリは、その任務を要約しつつ、最後に次のように述べている。

大切なことは、過程そのものを完成させることであって、それを停止することでも、それを空転させることでも、それに目標を与える事でもない<sup>(10)</sup>。

ここでのべられている過程とは、欲望する生産の過程、すなわち「欲望する機械」の作動する生産の過程のことである。スキゾ・アナリイズはたんなる分析にとどまるものではない。さまざまな精神分析の偏見を否定し、それらを無意識から払拭しつつ、無意識の社会的欲望のありかたを発見し、さらにそのうえで、その欲望の働く過程が十全であるように、すなわち「完成させる」ようにと、導くことなのである。ここで、彼らの方法における理論と実践の統一、というより、両者が渾然一体となり不可分である様子が、明確にしめされている。ス

キゾ・アナリーズはたんなる無意識の分析で満足するものではない。無意識を分析しつつ、それを十全に機能させ、働かせるようにと、みちびくものである。

#### 四、『アンチ・エディプス』から『ミル・プラトー』へ

ドゥルーズ・ガタリは『アンチ・エディプス』をなによりもまず、精神分析批判としてかいた。それは、ガタリの積年の課題であったとともに、時代思潮としての構造主義を、さらに前進しつつ批判的にのりこえるためには、まず第一にラカン派精神分析を批判的にのりこえなければならなかったからである<sup>11)</sup>。

しかし、『ミル・プラトー』（一九八〇年）において、彼らの関心は無意識とよばれる精神の領域から、世界の全体へとひろがってゆく。ここで世界というのは、自然と文化をもにふくんだ地球の全体のことである。ドゥルーズ・ガタリの関心は無意識からコスモスへとうつってゆくのである。地球上における生物の誕生と進化について（第三プラトー）、言語学批判からあたらしい「記号学」の提唱へ（第四、第五、第七プラトー）、文化の真の革命児たるアルトーへのオマージュ（第六プラトー）、ヘンリー・ジェームズやフィッツジェラルドの作品について（第八プラトー）、国家論・政治論（第九、第十二、第十三プラトー）、生成変化について（第十プラトー）、音楽論（第十一プラトー）等々。（ちなみにプラトー plateau とは、ペイトソンの用語で、強度の連続体のことである。彼らはここであたらしい本のイマージュを提出しようとして、あえて章とよばないでいる。）

これらのプラトーへの序として、彼らは「リゾーム」という文章をかいている。では、リゾーム rhizome とはなにか？

リゾームとは、異質の多様な諸要素の組み込みからなる、いかなる中心も原点ももたない、統一性を欠いた絶対的な多様性である。その特徴は、第一に、異質の諸要素・部分から成り立っていることで、彼らはそれを線の絡み合いから成り立っているとも表現する。（「リゾームには、構造、樹木、根などに見いだされるような点ないし位置といったものはない。線があるだけなのだ。」）第二に、それらの諸部分・要素・線は自由に結合することができる、ということである。第三に、第二とは逆に、任意の切断が可能だし、折り曲げるのも自由である。第四に、この組み込み状態において、それを構成する諸要素・部分は全体から独立して自律的であり、いかなる統一性にも従属しない、と

いうことである。第五に、自己完結的でなく、外部に向かつて開かれている、ということである。第六に、複写や複製の対象にならず、いかなるモデルとも関係がない、再現や表象の対象ではなく、現実の实践において構築すべきものである、ということである。<sup>(12)</sup>

彼らによって創造されたリゾームという概念を検討してみると、これが『アンチ・エディプス』において提唱された「欲望する機械」という概念ときわめてちかいことに気づかされる。

『アンチ・エディプス』に詳細にえがかれた「欲望する機械」はきわめて難解であるが、それをきわめて単純化すれば、異質なものが組み合わされ、組み込まれながら作動しているものであった（乳房―ミルク―口の欲望する機械）。以下に、『アンチ・エディプス』のテキストにそつて、欲望する機械とその作動する様子を、みなおしてみよう。

欲望する機械は二項機械であり、二項規則あるいは連結体制の下にある機械である。ひとつの機械は常に他の機械と連結している。生産的総合、すなわち生産の生産は、「これと」et「次にこれと」et puis、という接続的な形態をもって作動する。ということは、ここには常に流れを生産する機械と、この機械に接続されて流れを切断し採取する働きをするもうひとつの機械とが存在することになる（乳房―口）<sup>(13)</sup>。

これが欲望する機械の作動する第一の様式である。まさにリゾームの特徴であった異質なものの組み込み・組合せであることがわかるだろう。

いかなる連鎖も同質ではない。むしろ、それは種々の異なるアルファベットの文字が、つぎつぎと続いて行列をなしているのに似ている。しかもこの行列には、突如として表意文字や絵文字があらわれてくる。通りがかりの象や、のぼる朝日の小さい画像などが。種々の音楽や形態素などを（構成することもなく）混ぜ合わせている連鎖のなかに、突如として、パパの髭やママのあげた腕、リボン、小さな女の子、お巡り、短靴等といったものがあらわれる。…〔中略〕…

これらの諸連鎖は、たえずあらゆる方向へ離脱が行なわれる根拠地をなすものであり、ここにはいたるところ分裂が生起するが、これらの分裂はそれ自身で価値をもつものであり、とりわけ補完してはならないものである。だから、こうした点が機械の第二の性格をなすのである。つまり、離脱―切断である。<sup>(14)</sup>

これが「欲望する機械」の第二の作動様式である。これもリゾームの特徴であつた、多様な諸要素の切断とおなじことがいわれている。

欲望する機械の第三の切断は、残余―切断であり、機械の傍らにひとりの主体を機械の隣接部品としてうみだす切断である。<sup>(15)</sup>

ここでもまた切断というリゾームの特徴があらわれているし、また部分が全体から独立して自律的であるということが、残余としての主体についていえるであろう。それはまた自己完結的でなく外にむかつてひらかれているということでもある。

名詞としてもちいられた多様性という範疇は、「一」とか多といった次元のいずれをもこえるものであり、つまりそれが「一」や多を述語とするといった関係がかんがえられるべくもないものであるが、この多様性の範疇のみが欲望する生産を説明しうるものなのである。欲望する生産は純粋な多様性である。つまり統一体に還元されえないものを肯定するものなのである。いまやわれわれは、もろもろの部分対象、煉瓦、残余の時代に住んでいるのだ。<sup>(16)</sup>

もはやここまでくると、「欲望する機械」とリゾームとの関係は疑いえないものとなる。ここでは「欲望する機械」の作動を意味する「欲望する生産」という言葉が使われているが、それがはつきりと「純粋な多様性」であり、「統一体に還元されえないもの」として規定されているからである。

もはや多言を要すまい。リゾームとは、「欲望する機械」という概念を、より抽象化・一般化したものなのである。

われわれがいままで検討したところによれば、スキゾ・アナリイズとは、無意識の「欲望する機械」とその作動たる「欲望する生産」とらえることを使命とするものであり、それを阻むような精神分析の諸偏見（エディプス・コンプレックス、欠如、去勢、法律）を否定し批判するという否定的任務と、「欲望する機械」を発見し、その社会的なエネルギーの備給のありかたと、欲望のタイプを分析するという肯定的任務をもつものであった。

ところで私見によれば、この『アンチ・エディプス』において精神分析に反対して提唱されたスキゾ・アナリイズは、さらに方法として一般化されて、『アンチ・エディプス』の続編たる『ミル・プラトール』においても、もちいられているのである。スキゾ・アナリイズが方法として一般化されるとはどういうことなのか？ 『ミル・プラトール』においては、スキゾ・アナリイズはどうかとらえられ、もちいられているのか？

さきにものべたように、スキゾ・アナリイズとは「欲望する機械」をとらえようとするものであった。この「欲望する機械」という概念が『ミル・プラトール』においては抽象化され、一般化されて、リゾームという概念がつくられた。「欲望する機械」という概念が、リゾームという概念に抽象化・一般化されると、スキゾ・アナリイズもそれにもなつて一般化されるのである。図式的に単純化していえば、欲望する機械を発見し分析するスキゾ・アナリイズから、リゾームを発見して分析するスキゾ・アナリイズへと変化するのである。意識の根源に、分裂的な分裂・多様化した無意識が存在したように、万有の根源には自己同一性をもたないリゾーム的な多様性・多様体が存在する。それをみだし分析することが『ミル・プラトール』におけるスキゾ・アナリイズであり、その課題なのである。

##### 五、『ミル・プラトール』とスキゾ・アナリイズ

意識の深層に、無意識のレベルに、分裂症的なものがある。それを見いだすのが『アンチ・エディプス』におけるスキゾ・アナリイズであった。無意識は、意識には現前しないので、無意識のレベルに存在する分裂症的なものは分析されてはじめて存在が知られるようになる。存在するとは分析されることである。ここで、分析の対象が変わる。世界のなかに、分裂症的なものが存在する。それを分析することが『ミル・プラトール』におけるスキゾ・アナリイズである。この分裂症的なものとは、たとえばリゾームである。たとえば器官なき身体である。

たとえば動物への生成である。たとえばノマドである。それを分析することによって析出し、析出したものと共にわれわれの生（おのれの生ではなく）を解放へと導こうとするのが、私見によれば、『ミル・プラトー』におけるスキゾ・アナリーズなのである。

ではスキゾ・アナリーズについて論じられている箇所を引用しよう。

複数の線はひとつの「器官なき身体」に刻まれ、そこではすべてが作図され、逃走し、想像的形象も、象徴的機能もない抽象の線そのものとなる。つまり、C s Oの現実性。スキゾ・アナリーズにそれ以外の実践的対象はありえない。きみの器官なき身体は何か？きみ自身の線とは何か？きみがいま現に作成し、訂正をほどこしている地図はどのようなものか？きみ自身のため、そして他人のため、きみが引こうとしている抽象の線はどのようなもので、そのために何を犠牲にするのか？きみ自身の逃走線は？逃走線と一体化するきみのC s Oは？もう駄目？耐えられない？脱領土化する？きみが断ち切るのはどの線で、きみが延長し、取り戻す、形象も象徴もない線はどれなんだ？スキゾ・アナリーズの対象は要素でも集合でもないし、主体や関係でもなければ、構造でもない。スキゾ・アナリーズの対象は、集団も個人もことごとく貫く線の配置をおいてほかにないのである。欲望を分析するスキゾ・アナリーズは、相手が個人だろうと集団だろうと社会だろうと必ず実践に直結するし、政治にも直結する。存在以前に政治があるからだ。スキゾ・アナリーズはヌーヴェルの技法に似ている。あるいはむしろ、スキゾ・アナリーズには応用の問題などありえないというべきだろう。スキゾ・アナリーズが抽出するさまざまな線は、取り上げた座標系に応じて、人生の線にも、文学作品や芸術の線にも、あるいは社会の線にもなりうるからだ。

彼らによれば三通りの線があるという。硬質な切片、柔軟な分子状の切片、そして逃走線である。硬質な切片性の線は、輪郭を区切り分節化する、切断の線である。分子状の切片性の線は、微粒子を放出しながら亀裂が生じる亀裂の線分である。おなじみ逃走線は、断絶の線である。この三種類の線の分析がスキゾ・アナリーズの課題となるのである。

少なくとも三つの線があるのだ。一つは輪郭のはっきりした硬質な切片性の線、もう一つは分子的な切片性の線。それから抽象の線、つ

まり、生死にかかわるといふ点では最初の二つにひけをとらない逃走線。第一の線上では言葉と会話、問いと答え、いつ果てるともつかぬ説明、話のまとめなどがひしめきあっている。第二の線は、解釈されるべき沈黙や暗示や瞬時のほめかしから成り立っている。第三の線は閃光のようにすばやい。逃走線が走行中の列車に似ているとしたら、それはこの線上でリニアな跳躍がおこなわれるからであって、そこにはひとつの草、破局や衝撃など、あらゆるものについて「その字義どおりの意味」で語ることができるし、なにかの代理となるものなどもはや一つとして存在しないという事態の到来を、静かに受け入れることができるからである。しかし、三つの線は、たえず混ざりあっているものだ。

互いに絡み合い、ときには判別すらむずかしいこれらの線の配置を分析し、われわれを解放へと導くことが、スキゾ・アナリーズの役割なのである。だからスキゾ・アナリーズは、もはや無意識だけを対象とするものではない。精神分析に対立して提唱されるといった、領域的な限定をつよく担ったものではない。そうではなくて、生の全体を、世界の全体を、宇宙の全体を、分析の対象とするものなのである。そして、それはたんなる分析ではない。われわれの解放への実践を欠くべからざる部分としてふくみつつおこなわれる分析である。解放への実践を欠くべからざるものとして、理論と実践とが一体となった分析である。

しかし、すでにのべたように、現実のリゾーム的なものからだけで成立しているのではない。分子状の切片や、逃走線に対して、硬質な切片性の線が存在したように、分節化し秩序立て、主体の自己同一性を確立し、それをゆるぎないものとさせ、組織を秩序立て、中心をつくって、それを原点として階層秩序をつくりあげ、さらにそれを拡大し、強固なものとしてゆくような運動がある。そのような運動と、反対の運動とのせめぎあいがある、実在の世界なのである。そのダイナミズムをリアルに分析しなければならぬ。これこそが、スキゾ・アナリーズである。そこでドゥルーズ・ガタリは、さまざまな概念を彼らじしんで創造しつつ分析を試みる。それはおよそ次のようなものである。カオスに発する世界の創造の運動として、地層・地層化がある。それは蓄積・凝結・沈殿・褶曲といった現象で、この現象はマクロ的（モル的）であることも、ミクロ的（分子的）であることもある。これは帯状をなし、分節作用をもつ。おのおのの地層または分節は、コード化された環境と形式化された実質からなる。（形式と実質、コードと環境は実際には別々なものではない。）また表現と内容を分節する。表

現と内容は実際に区別され、それぞれ独自に形式と実質をもつ。伝統にしたがって、三つの地層、すなわち物理化学的地層、有機的地層、人間的形態をもつ地層が分類される。地層はどんなにそれが多様であっても、構成的統一性をそなえている。

これを前提としたうえで、どのような運動がわれわれを地層の外へといざなうのかを、彼らは問題とするのである。地層なしで、すなわち形式も実質も、内容も表現も、組織も発展もなく、分節をうしない、リズムにさええられることもなく、いかにして形式化されない物質、非有機的生命、非人間的な生成変化に（ただし純粋なたんなるカオスとは別様に）到達しうるのか？（別言すれば、いかにして抽象機械に到達しうるか、ということになるのだが、そのことについてはのちに述べるだろう。）

ドゥルーズ・ガタリは、次のような諸概念を創造して、この問題に対応しようとする。すなわち、組み込み *agencements*、成立平面 *plan de consistance*、器官なき身体、脱領土化 *déterritorialisation*、抽象機械 *machines abstraites* などである。

このうち、組み込みは、地層とは別のものだが、さまざまな類型があり、その類型によつてははまだ地層に属しているといえる組み込みも、属していない組み込みもある。ほぼ、「機械」（もちろんドゥルーズ・ガタリ流の）にちかいはばひろい概念であるとかんがえてよいだろう。大別すれば、第一に、いまだ内容と表現に分割され、領土を包み込んでいるかぎりでの、地層に属する組み込み。第二に、脱領土化の線によつて移動させられ、あるいは大地へと、あるいは宇宙的な抽象機械へとむけて開かれるような組み込みがある。

リゾームについてはすでに説明した。それは地層からとおい。しかし、線の観点からすれば、線が点に従属しているような、また斜線が水平線と垂直線からなる条理空間に従属しているような線の状態がある。このタイプの線は、モル的で、樹木（ツリー）的で、二項的、切片的なシステムを形成する。まったく別の線の状態があり、斜線は解き放たれ、線は輪郭をつくらず、もの間、点の間に引かれ、なめらかな空間（条理的でない空間、砂漠・ステップ・海など）に属し、分子である。このような状態の線がリゾーム的多様体を構成する。標準的合法的でない遊牧的多様体、変則的で、生成変化の多様体である。つまりリゾームに対してツリーの多様体が存在するのである。そして、ただ二つのタイプを分けるだけでは不十分であり、一方から他方への移行、とくに多様体の樹木化が問題なのだ。リゾームにもつねに危険がともなっている。

さらに地層からはずれたものとして、成立平面や器官なき身体がある。成立平面は組織の平面と対立する。後者は主体の形成にかかわり、

前者は形式化されない要素の間の速度や強度の生成にかかわる。成立平面はリズム型多様体を強化し、此性、事件、生成変化が登録される。彼らによれば、器官なき身体と成立平面が同じものであるかどうかということよりも、問題なのは平面のさまざまな部分がいかに連結されるか、である。連結の数を増すものだけが、選択され、保存され、それゆえ創造され、成立するのである。

脱領土化の運動は、反対の運動（再領土化）の存在などによって、さまざまな形態（少なくとも四つ）が存在し、それらを区別し分析しなければならぬが、根本的には逃走線的作用である。

そして、究極的には抽象機械が存在する。それは形式化されない物質（ただし、むきだしの均質な物質ではなく、特異性や此性をも含む運動―物質）と形式的でない機能（非表現的なメタ言語ではなく、言語のなかに外国語をふくみ、言語活動のなかに非言語的カテゴリーを含む運動―表現性）からなる。形式とも実質とも、また内容とも表現とも無縁である。形式とも実質とも無縁だから、抽象的とよばれるのである。ただし、プラトンのアイデアのような一般的抽象機械が存在するのではなく、抽象機械は具体的な組み込みにおいて作動する。抽象機械は、組み込みを脱コード化し、脱領土化する。抽象機械は先端をえがきだし、領土的組み込みを別のタイプの組み込み、分子的なもの、宇宙的なものにむけて開き、生成変化を構成する。だから抽象機械は、つねに特異であり、内在的である。抽象的で、特異で、創造的で、いまここにあつて、具体的ではないが現実的であるがゆえに、抽象機械は日付と名前をもつ（アインシュタインの抽象機械、ウェーベルンの、バッハの抽象機械など）。シニフィアンとも主体的なものとも無縁の一つの体制がここにある。

組み込みは、連結を開き、多数多様化するとき、強度や強化の量子化作用をとまなつて成立平面をえがくとき、抽象機械にちかづく。しかし、閉塞的な接合や、地層をつくる組織、ブラック・ホールなどをもたらすとき、抽象機械から遠ざかる。こうして、連結を増大させる成立平面をえがく能力にしたがつて、組み込みは選択される。スキゾ・アナリイズとは、たんに組み込みと関係する抽象機械の分析だけではなく、抽象機械と関係する組み込みの量的な分析でもある。

こういいつも最後に彼らは、抽象機械さえも相対化する。抽象機械にも類型があり、第一に上述したような特異で突然変異的で、増殖する連結をもつた成立的抽象機械。しかし第二に、成立平面を別の平面によって包囲する地層化の抽象機械があり、第三に、全体化、均質化、閉鎖的接合をおこなう超コード化あるいは公理的な抽象機械があるという。それらは、実践においてさまざまに交錯し、混ざりあつ

ているという。

このように、地層から、組み込みをへて、リゾーム、成立平面、抽象機械へと遠ざかってきて、さらにそれぞれのうちに地層へともどることが、(抽象機械にすらも)あるのである。解放への運動は、つねにどこまでも危険となりあわせにおこなわれるのである。地層化の運動と、逃走線の作用、それらの複雑なからみあいからなる現実の分析と解放への可能性の模索、これが、『ミル・プラトー』のスキゾ・アナリーズである。彼らが精神分析批判の方法として提唱し、それをさらに一般化して構築した方法の到達したがたがここにある。<sup>(19)</sup>

このように、スキゾ・アナリーズはそれじたい、諸概念が錯綜・乱舞し、明快な図式も、中心となる概念も存在しない。それが分裂症的なものの発見をめざすからには、けだし当然かもしれない。解放への過程の完成は、かくして実現される。

## 六、スキゾ・アナリーズと学問

さきにわたしは、学問とは、おのれの生きる現実を動かしている原理の探求である、とのべた。さらにそのような原理をふまえて、よりよき現実を実現するための努力と実践も学問のうちには含まれていなければならない、とのべた。

この意味で、スキゾ・アナリーズは、すぐれた学問的方法である。すでにのべてきたように、スキゾ・アナリーズそのものが彼らのうちでも変化している。しかし、その変化をつらぬいて、スキゾ・アナリーズの実践的性格は不変なのである。この分析はつねに社会的実践を前提として成立しているのである。

たとえば無意識の分析は、分裂症的な生の過程の完成をめざしている。そのためには、無意識における分裂症的なもののみいださなければならぬ。無意識はそれじたいとして自然に現前するものではないのだから(そうでなければ無意識とはいえない)、無意識のなんらかの存在を主張するためには分析しなければならないのだ。分裂症的な無意識が存在するとは、スキゾ・アナリーズされることである。そのうえで、分裂症的な無意識である「欲望する機械」を十全にくみだして作動させることが必要なのである。もちろん分裂症的な生の過程を完成するために。

同様に、三種類の線の分析も、たんなる分類ではもちろんないのである。たしかに、かたまり絡みあって、判別しがたく入込んで存在す

る、硬質な切片の線、分子状のやわらかい線、逃走線を分類し區別して、それらの配置をみさだめるのは重要なことである。しかしながら、それは線の配置を分析することそれじしんに価値があるというより、線の配置の分析をふまえて、分子状のやわらかい線や逃走線を働かせて、分裂症的なもの、リゾーム的なものを肯定し解放することが重要なのである。分析をふまえた多様体の肯定と解放。分析がなければ存在も肯定できないから、純粋な分析の作業も重要である。しかしそれは単独で重要なのではなく、肯定と解放へとつらなる実践に分析が導かれるがゆえに重要なのである。三種類の地層の分析からはじめていくのは（地層が存在するということは動かしがたい事実なのだから）、その作業事態に興味があるというより、そこからはじめて具体的な組み込みの分析へと移行し、さらにリゾームや器官なき身体や成立平面へとより地層からの離脱を進行させ、ついには抽象機械にまで脱出の過程を遂行する、といったことが問題になっているのである。それは有史以前の地球から発して世界史を横断し、精神分析の椅子やわれわれの卑近な日常生活の言語や遊びや夫婦喧嘩をもとらえつつ、解放への道を、すなわち非有機的で非人間的な生命、というより生成変化への過程を、それにとまなう危険を十分に考慮しつつ、えがきだそうとするのである。（ちなみに、この解放にとまなう危険を十二分にわきまえるということが重要なのだ。浅田彰の最大の間違えのひとつは、逃走を理念化してそれに伴う危険を考慮しなかつたため、逃走そのものが安全にやすやすとおこなわれるかのようなイメージをつくりあげたことである。逃走とはまったく逆に、生死をかけたものであり、つねに命懸けの逃走である。）まことにスキゾ・アナリイズは、実践的分析である。理論と実践、思弁と実践は、スキゾ・アナリイズにおいて不可分である。

かくしてわたしは『資本主義と分裂症』にそくして、スキゾ・アナリイズの概念を検討してきた。そしてとくに後半では、彼らの分析の様子を瞥見してきた。それは明晰判明な分析ではないが、意図は明快であり、たとえあまりよくわからなくとも彼らがなにをやりたいのか、あるいはやろうとしているのかはよくわかり、すくなくともわたしにとってはこころの琴線にふれるものであった。

しかし、いかに彼らから刺激を受けたとしても、それを祖述し解説するだけであれば、また翻訳しコメントをくわえることで満足しているのであれば、とても学問とはいえない。方法としてのスキゾ・アナリイズに共感するのであれば、それを理解したあとでは、わたしはわたしでおのれの生きる現実を、スキゾ・アナリイズするのだからなければならない。おのれの手で分析し、実践するのでなければならない。そして、おのれおのれと実存主義的な語彙で、いささかドゥルーズ「ガタリとは不似合いの表現をつかってきたわたしから逃走線を引き、脱出

して、生成変化を実現させなければならない。おのれという点から、人間という地層から、脱出しなければならない。そのためには、スキゾ・アナリーズについて書くのではなく、それを方法として実践するのだからなければならない。

小生とて、手をこまねいていたわけではない。実際に、日本文化の諸側面にかんするスキゾ・アナリーズをいくらか試みてはいる。<sup>(20)</sup> 彼らが成功しているか否かははなはだ心許ない。あるものを崩すのは容易だが、生成変化やリズム的多様体を構築することは、はるかにむずかしい。逃走線を作動させ、抽象機械へ到達するのはけだし容易ではない。おそらくここにドゥルーズ「ガタリ」のむずかしさがある。どうして彼らにかんする本は、たいていは退屈なのか？（デリダにかんする場合とくらべてみるがいい。）その理由が、おそらくはここにある。しかしどんなにまじしい成果であっても、日本の現実をスキゾ・アナリーズするということが、きわめてドゥルーズ「ガタリ」的な問題であり、彼らの問題意識をまっとうに受け継いでいることについては疑う余地がないとおもわれる。

\*この論文は、筑波大学学内プロジェクト奨励研究による助成に多くをおっている。

[注]

- (1) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Édipe*, les éditions de minuit, 1972, p. 352. (ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳、河出書房新社、一九八六年、三五二頁。) 以下、AOと略記する。傍点(原文はイタリック)はドゥルーズ「ガタリじしん」による。
- (2) おそらく、この概念の用法は、ドゥルーズがガタリの影響をつよくうけて書いたブルースト論にはじまるようである。
- (3) AO, p. 371. (邦訳三六九頁。)
- (4) AO, pp. 384~385. (邦訳三八二頁。) 傍点(原文はイタリック)はドゥルーズ「ガタリじしん」による。
- (5) AO, p. 404. (邦訳四〇二頁。)
- (6) AO, p. 409. (邦訳四〇六頁。)
- (7) AO, p. 411. (邦訳四〇九頁。)
- (8) AO, p. 427. (邦訳四二四頁。)
- (9) AO, p. 439. (邦訳四三七頁。)
- (10) AO, p. 458. (邦訳四五六頁。)
- (11) もちろん浩瀚な書物である『アンチ・エディプス』の内容はそれだけにとどまらない。それはマルクスにふかく影響された歴史哲学をもつ。それは精神分析批判を縦軸にもち、唯物史観を横軸にもつ。
- (12) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Mille plateaux*, les éditions de minuit, 1980, pp. 13~20. (ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー』宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、河出書房新社、一九九四年、十九~二五頁。) 以下、MPと略記する。
- (13) AO, p. 11. (邦訳十七頁。)
- (14) AO, pp. 46~47. (邦訳五四~五五頁。)
- (15) AO, p. 48. (邦訳五六頁。)
- (16) AO, p. 50. (邦訳五七頁。) 傍点(原文はイタリック)はドゥルーズ「ガタリじしん」による。
- (17) MP, p. 249. (邦訳二三三~二三四頁。) 傍点(原文はイタリック)はドゥルーズ「ガタリじしん」による。
- (18) MP, p. 242. (邦訳二二七頁。)
- (19) MP, pp. 627~641. (邦訳五五九~五七一頁。)
- (20) 拙論「日本文化のスキン・アナリーズ」(『筑波哲学』第三号、筑波大学哲学・思想研究会、一九九二年)、「ドゥルーズ」ガタリ・芭蕉・浅田彰」(『フランス哲学・思想研究』第一号、日仏哲学会、一九九六年)などをご参照いただければ幸いです。

## Qu'est-ce que la schizo-analyse?

Haruo KOTANI

Deleuze et Guattari inventèrent la schizo-analyse pour faire concurrence à la psychanalyse parce que cette dernière fausse l'inconscient et l'enferme dans le complexe d'Œdipe. Au contraire la schizo-analyse considère l'inconscient comme schizophrène, et le nomme "machines désirantes". L'inconscient compris comme "machines désirantes" est si divers qu'il agit sur la réalité sociale et la produit. C'est la schizo-analyse qui découvre ce fonctionnement de l'inconscient.

Ce type d'analyse apparaît pour la première fois dans *l'Anti-Œdipe*, et ils le reprennent dans *Mille plateaux* en le modifiant. Dans ce deuxième ouvrage, la schizo-analyse qui avait découvert l'inconscient divers et schizophrène, en tant que "machines désirantes", s'applique à trouver cette multiplicité (rhizome) dans tous les domaines du monde. Elle s'efforce de chercher la multiplicité rhizomatique qui montre le manque d'identité chez tous les êtres. La schizo-analyse n'est pas seulement une analyse théorique, mais aussi une analyse pratique qui dirige notre vie vers la délivrance et unifie la théorie et la pratique.

N'est-ce pas là l'objectif de toutes sciences véritables?